第十七話　遠くの町

『マナ』は川の先にある遠くの町を見ていた。そこはこの村に越してくる前に『マナ』が住んでいた町である。楽しくも、苦しくもあった、そんな思い出深い町である。青春を過ごした学生時代。恋に、仕事に、忙しく過ごした若かりし社会人時代。しかし段々と仕事がつまらなくなり、自分の夢が破れていってしまった、そんな社会人時代でもあった。学生時代は色々な夢を持っていたのに、今では、せっせと仕事をする毎日である。昔から色々な物を作るのが好きで、何時はすごいロボットを作ってやると意気込んでいた時期もあった。昔の自分が懐かしいなと思った。『のら』は傍らで、そんな『マナ』の顔をジッと見ていた。そして「『マナ』どうしたの」と尋ねた。「ちょっと昔が懐かしくて」と『マナ』は答えた。「昔はもっと夢があったのに、今は何かつまらなくて」と言うと、『のら』が「夢って」と聞いた。「そうだな、ロボットでも作ってみたいな。そう、皆の役に立つ、凄いロボットさ」。『のら』は首を傾げながら、「作ったら」と言った。『マナ』はガクッとしたが、簡単に言える『のら』がうらやましなと思った。そして「『のら』、「ロボットはすごく難しんだぞ」と言ったがその後、「すごく難しいから夢なんだよな。そして簡単には諦めちゃいけないよな」と『マナ』は心の中でつぶやいた。

所で「『のら』の夢は」と逆に『のら』に聞き返した。『のら』はしばらく考えているようであったが、そのままジッとして動かなくなってしまった。よく見ると寝ているようである。『マナ』は『のら』の頭をゴンとゲンコツで叩いた。そして「行くぞ」と言って『マナ』は歩き始めた。「『のら』の夢は世界中の旅」と言って駆け出した。